

人吉・球磨の方言

敬語について

内山 淳子

同一国語の中で一定の特色をもつ地域の言葉全体を方言と呼ぶが、自分で無意識に使用して方言として認識されていないものもある。方言はその一定の地域の中だけにたのでは、意識することなく終わるかも知れない。

私は中学に上がる年に人吉から熊本市へ出てきて、自分の話す言葉が周囲の人と違っていることに気付き、自分の身につけていた言葉が球磨弁であることを知った。熊本市内に移って十年が経とうとする今、私は自分の中で薄れていく球磨弁とはどういう言葉であったのかを知り直したいと思った。またマスメディアの発達や義務教育によって現在の球磨弁はどう変っているのだろうか。

私は球磨弁について、その概略を調べる時に一番興味を持った待遇表現を詳しく調べてみることにした。そこで今でも使われている球磨弁とともに、球磨弁がこれからどういう変化をしていくのかを調べたいと思ったので、高年層を対象とした自然会話傍受と、小・中・高校生を対象とした方言待遇表現に関するアンケート調査を行い、球磨弁の

若年層における変化をも探っていきたいと思う。

第一章 人吉・球磨の地理的概説と方言の体系

人吉・球磨地方は、九州山地の山々や断層崖に限られた盆地であり、他の地域から隔絶され、独自の文化・生活・言語の発達してきた所である。七百年余りの長きに亘って同一氏族（相良氏）の支配をうけ、安定した社会状況の中で発展した地域で、明治に入って移住者が増え、現代になって道路や鉄道が整備され、温泉や球磨川下りをメインにした観光都市となった。しかし現在は人口の流出が激しく次第に過疎化が進んでいる。

人吉・球磨地方の方言は、熊本県内の方言を三つに区分した時、天草・芦北と同系列の鹿児島方言流の薩隅方言域に入る。熊本県内の残り二つの系列は熊本市中心とする、長崎・佐賀（肥前）・福岡と流れを同じくする肥筑方言で、さらにこれは音韻について阿蘇郡を中心とする東部方言と、

熊本市内中心の北部中部方言に分けられる。人吉・球磨・天草・芦北などの薩隅方言域を県内では南部方言と呼んでいるが、北部中部方言、東部方言とはその源流が全く異なっているし、互いの方言の源流である薩隅方言と、北部中部方言の源流である肥筑方言とが互いに理解し難かったことを考えると南部方言は熊本県内では多少特異な方言と見ることが出来る。

このように球磨弁の体系を調べていた時に、球磨弁の特徴ともいえる「ゴザンモス」という敬語を知った。方言に待遇表現があるという意識がなかった私は、この事に非常に興味を覚え、球磨弁の待遇表現について調べることにした。

第二章 人吉・球磨弁の待遇表現法

先ず、球磨弁の待遇表現を調べるために球磨弁が色濃く残っているだろう高年齢層を対象とした自然会話の傍受を行った。調査の対象者は人吉出身の次の四人の方である。

- A 九十歳男性 元役場勤務
- B 六十八歳女性 元教師・役場勤務など
- C 六十八歳男性 農業
- D 六十五歳女性 農業

AとBは昔同じ時期に役場に勤めており、上司と部下の関係で、調査の時に逢ったのは数年ぶりであり、互いに遠慮し合う間柄にある。また、BとCは同級生で現在家も近

所であり、親しく交友がある。CとDは夫婦でBはDとも親しく交友があり、年令によっての隔たりはない。この四人の方の会話傍受から得られた球磨弁の待遇表現について見ていきたいと思う。

尊敬「なはる」

人の行為や動作を表す動詞の連用形につく。意味は共通語「くなさる」ということをあらわし、「おくなはる」という形が見られ一層高い敬意をあらわしている。後述する「なる」と較べると、遠慮すべき間柄(年上の人や上司など)には「なはる」が使われて「なる」は全くと言っていいほど聞かれない。「なはる」と「なる」の間には、その敬意の高さにおいてはっきりとした区別がある。

尊敬「くだはる・くだる」

動詞の連用形につくが、「取ってくだはんもし」「してくだはんもすか」のように接続助詞「て」がつくことが大部分のようである。

共通語「くくださる」という意味で、非常に改まった言い方であったと思われる。「くだる」の方は「くだはる」のくだけた言い方であるが、B・C・Dの会話においても「くだはる」が使われるなど(例「ツケモンバトツテクダハイヨ」(漬物を取って下さいよ))最近は「くだはる」も「くだる」も使われ方の差、つまり敬意の高さの差がなくなってきたと思われる。そのためか本来は「くだはる」には命令形はなかったのであるが、現在は使われるようになってきている。また、「くだる」の方は「シテシヤカクダ

レンバ」(してさえくださらなかったら)のように副助詞「しゃか」の下にもつくが、「くだはる」が「しゃか」の下につくことはない。

丁寧「ござんもす・ござんす」

この語の接続は複雑で、形容詞のウ音便や助動詞「ぐたる」の連用形「ごと」などにつく。特に改まった敬語のようで、共通語「〜でございます」という意味である。東秀吉著『球磨弁―助詞と助動詞と』では「ござんもす」となっているのだが、私が実際に調査したところでは「ござんもす」であると思う。

使用頻度は圧倒的に「ござんもす」の方が高く、「ござんす」は二人の会話では一度しか聞かれなかった。また、二人の会話は殆んどこの「ござんもす」と後述する「もす」が使われていた。球磨弁の待遇表現の中でも最も特徴的だと言える。

この「ござんもす」のくずれた形で「ごわす」という語が聞かれたが、男性にしか使われず、調査の時は三度出てきただけだった。

丁寧「もす」

人の動作や行為・自然・事象を丁寧に述べようとする時の言葉で、共通語「〜ます」に当る。動詞の連用形につき、命令形の場合は、「キカセテクダハンモシ」(聞かせて下さいませ)のように尊敬語の後につく。

先に述べたように「ござんもす」「もす」は共に球磨弁の中でも特徴的な語であると思われる、その表現は共通語から

かけ離れており、特に改まった敬語であるということも手伝って、今ではよほど高齢の人でなければ使わない語になってしまっている。調査の時の会話においても、特に「ござんもす」を用いたのは九十歳の男性であり、女性の方はその表現につられて使われたという感じであった。「もす」にしてもやはり、高齢な相手で立場的に隔たりがあったから表れたと見れるものである。

以上の語はAとBの会話によって得られた比較的敬意の高いと思われる待遇表現である。次にB・C・Dという親しい間柄の三人の会話に見られた待遇表現を述べたい。

尊敬「なる」

人の動作や行為を表す動詞の連用形につき、前述の「なる」と同じ意味を持っている。

使われ方は非常に儀礼的で、敬語としての意識は薄いという感じがする。先の「なはる」と較べると、親しい間柄では「なる」しかつかわれないことなど、「なる」は非常に軽い敬意しか含まれていないことがわかる。が、「なる」の下に「もす」が付いた場合(なんもす)には、「なはる」に「もす」が付いた場合(なはんもす)との敬意の差が小さくなるという現象が起こる。事実、AとBの会話においても「なはんもす」と同じように「なんもす」も使われていて、その二つの使われ方に差を見ることはできなかった。

尊敬「やる」

動詞の連用形について、ほとんど敬意と言えないような敬意を表している。意味は明確ではなく「〜しておられ

る」という気持ちを含んでいるようである。近しい間柄の場合には「なる」よりも頻繁に使われることから、一層敬語としての意識は薄く、単に言葉をやわらかく表現するために使われていると思う。

以上のように見てくると、東秀吉著『球磨弁 — 助詞と助動詞と』に述べられていたように、実際球磨弁の動詞そのものの待遇表現は見られなかった。球磨弁の待遇表現は、人の動作や行為を表す動詞に尊敬や丁寧の補助動詞がついて敬意をあらわしている。

次に文末詞による敬意表現と人称代名詞による敬意表現を見ていく。

文末詞の敬意表現には、「な・なあ」「もん」の二つがある。「な・なあ」はただの呼びかけにも聞こえるが、その使われ方を注意深く聞いてみると、文全体をやわらかく表現する働きをしていて、軽い丁寧意識をもって使われている。「もん」の方は「くじゃっもんで」という形で接統詞的な使い方をするものと、文の終りにつけて婉曲的な言いまわしにする使い方がある。後者の方は言葉をやわらかくする点において丁寧語的といえる要素があると思われる。

最後に人称代名詞であるが、一人称代名詞の場合、敬意の意識があらわれるものではなく、丁寧に言う時には共通語が使われるので、球磨弁が独自の一人称代名詞の敬語形体をもっているとは思われない。二人称代名詞になると「オタク」という丁寧な表現が聞かれる。しかし、初対面であ

るとか、役職・立場が上の人などに対しては、名前で「〇さん」というのが普通であり、「オタク」が丁寧な言葉であるとはいえず、使われることは殆んどない。また、親しい間柄の人に対して「アタ」や「ヌシ」という呼び方があるが、相手を敬って呼ぶという意識はない。三人称代名詞には「アンヒト」と「アヤツ」があり、「アンヒト」は、「あの人」が変化した語であるので第三者のことを丁寧に述べる場合に使われ、「アヤツ」は年下に対してだけ使われるのでぞんざいな印象を受ける。しかし、一般的に第三者を呼ぶ場合には名前を述べるのが普通であり、代名詞を使うことは少ない。

以上のように、球磨弁においてはあまり人称代名詞による丁寧・尊敬の表現は、はっきりとは見られない。

総体的に見て、方言を使う時場面が改まる場合が少ないので、特に改まった表現（「ごさんもす」等）でない限り敬語としての意識は薄いと思われる。

第三章 若年層を対象とした方言待遇表現

のアンケート調査 — 分析と考察 —

若年層に残っている方言待遇表現を知ることによって、球磨弁がどのように変化していくかを探ってみようと思ひ、小・中・高校生を対象としたアンケート調査を行った。それぞれ、小学校六年生、中学校三年生、高校三年生を四十二名ずつアトランドムに選び、市内在住三世同居者、市

内在住者、市外在住経験のある三世代同居者、市外在住経験者に分けて分析を行った。その一語一語について見ていきたいと思う。

「ぐざんもす」

市内在住者も市外在住経験者も「知らない」とする者が過半数を占め、二者の間に違いがあらわれていない。ただ、「ぐざんもす」のつく語が人の行為や動作である場合、高校生の市内在住三世代同居者は、「知らない」とする人と「聞いたことはある」とする人が同じパーセンテージを示した。高校生の市内在住三世代同居者が、そうではない者に比べて少しではあるが昔からの方言を耳にすることが多いようで、敬語にもそれがうかがえる。一方、「ぐざんもす」のつく語が自然・事象である場合には、各学年とも市内在住者、市外在住経験者など全てを合わせて、「知らない」とする人が人の行為や動作に「ぐざんもす」がついた場合よりも多くなっている。これは、この二つの「ぐざんもす」の間に微妙な意味の違いがあるからではないだろう。つまり、人の行為や動作につく「ぐざんもす」には聞き手に対する丁寧意識だけでなく、行為者に対する尊敬意識が含まれているのかも知れない。

「もす」

「もす」について一つ特徴的なことがあげられる。「なはる」や「なる」に「もす」がついた場合（「なはんもす」「なんもす」）聞いたことがある人、または知っている人が各学年とも平均十〜十三%を越えており、高校生の市内三

世代同居者などは四十%に達している。一方、「もす」が一般動詞についた場合、小・中学生は「なはんもす」「なんもす」とあまり差がないが、高校生を見ると、「知らない」という人が増え、耳にしたことがある人は最高でも十七%まで下がってしまう。これは「なはんもす」「なんもす」が一語として捉えられ、割に日常的に耳にすることがあるということである。が、自分が使っている言葉としては「なはんもす」「なんもす」ともに全く現れないし、「もす」も「です」に変わって使われていない。つまり、實際耳にしたことはあってもあまり頻繁には聞いていないということである。だから自分の使う言葉として「もす」が定着していないのである。

「くだはる」

この語は「聞いたことはある」「知っているが使わない」という人が、小学生では二十七%、中学生四十八%、高校生六十七%と年齢があがるにつれて耳にしたことがある人が増えるという特徴がある。小・中・高校生の年齢とそのおじいさん・おばあさんの年齢を対比して考えてみると、高校生のおじいさん・おばあさんの年齢層（高齢層と思われる）にはまだ割合に使われている語だと見ることができ。ここで若年層が実際に使っている言葉を見ると、共通語「ください」になってしまっている。「くだはる」には親しい間柄で使う「くだる」というくだけた言い方があるが、この「くだる」さえ若年層には見られない。つまり二章の所で少し述べたように、現在「くだはる」と「くだる」の

用法に差がなくなってきたので、二つの同列化した上で共通語にとって代られたのであろう。

「なはる」

「なはんもす」と「なはる」とを比べると全学年を平均して「知らない」とする者は両方五十%であり差がないのだが、「知っているが使わない」とする者は全学年平均「なはんもす」八%、「なはる」十四%と意外に大きな差が現れた。また、「聞いたことはある」とする者は全学年平均「なはんもす」三十三%、「なはる」二十八%と逆に「なはんもす」の方が多くなっている。「知っているが使わない」とする者のパーセンテージが「なはる」の方が高いということは「なはんもす」よりも「なはる」単独の方がより多く使われていると見ることができ。しかし、「なはんもす」にしても「なはる」にしても自分が使う言葉として出てくることはなく、それぞれに消えていっていると考えられる。

「なる」

この「なる」については大変興味深い結果が現れた。まず「なる」+「もす」の形になると「聞いたことはある」「知らない」とする者が各学年とも七十五%前後あり、小学生においては八十%を越えているのに対して、「なる」が一般動詞についた場合には「知っているし使っている」とする者が中・高校生においては七十%を越えており、小学生でも五十%を越えていることである。つまり「なる」は現在でも広く一般に使われていて、「なんもす」は耳に

したことがあるという程度にしか使われていないと見ることができ。「もす」の所で述べたように「もす」が次第に使われなくなっていて、それに追従するように「なんもす」も使われなくなっているのだろう。

また、後に詳しく述べるが「自分が使っている言葉」の回答で、元来「なはる」が使われていた所で現在は「なる」が使われるようになってきている事も興味深いことである。これも先に述べた「なはる」が使われないことの裏付けになっている。

人称代名詞

人称代名詞において、まず一人称の場合は待遇の差は現れにくいといえる。使われる一人称は親しい間柄においても、先生などに対しても同じように「おれ」もしくは「あたし」であり、話相手によって自分の呼び方が変わることはない。

二人称の場合になると、少し丁寧に言う時「おまはん」という言葉があるのだが、「知っているが使わない」「聞いたことはある」とする者が全学年平均六十八%で、殆んどは相手の人の名前を呼ぶことが普通である。

次に三人称については、丁寧な表現として「あんひと」という方言を使う人が四十六例と割に多い。親しい仲で話しをする場合には「あいつ」「あやつ」という語が出てくるので、「あんひと」は丁寧ないい方として意識されているといえよう。

人称代名詞の最後に不定称を見てみようと思う。丁寧な

表現の場合「どんひと」が五十九例と多く使われ、親しい間柄になると男女の別なく「だい」が使われる。しかし注目したいのは高校生と小・中学生の間で「だい」を使う・使わないで大きな開きがあることである。高校生は「だい」を使う者が大部分であるのに対し、小・中学生では「だれ」であって、「だい」は「知っているが使わない」か「知らない」のである。耳にしても使わないというのは共通語が浸透しているからであろうが、何故三年間という期間を置いただけでこのような違いがでるのか、疑問が残るところである。

文末表現「な・や」

文末詞の「な」と「や」は少数「や」が丁寧であるとす
る者がいるものの、全体において「な」の方が丁寧であると認識されている。確かに「な」の方が少し丁寧な表現であるのだが、実際には「ね」が最も多く使われ、次に「や」「な」の順になっている。「な」の方が丁寧にもかかわらず、「や」の方が使われるのは「ね」が「な」にとつて代わって方言があらわれるのが「や」であるからだと考えられる。

以上アンケートの調査結果を分析してみたが、自分が現在どのような言葉使いをするかについて興味深い結果だったのでそのことについて述べてみたい。

「なる」の新用法

先に少し述べたが、「なる」について注目すべき調査結果が見られた。もともと「なはる」が使われるべき相手

(先生や年下の人)に対しても現在は「なる」「やる」が使われていることである。より丁寧に述べようとする時には共通語「です」をつけて「なっです」「やっです」という言い方をしている例も決して少なくない。「なる」「やる」が若年層の間でも一般的に使われているということだと思われる。また、親類やあまり親しくない同級生と話す時にも「なる」「やる」が使われていて、若年層が使う方言の敬意表現は「なる」「やる」しか残っていず、より丁寧に話すべき場合は先程述べたように、共通語と混淆して使うようになっている。しかしこの現象も、一番顕著に見られるのは高校生であって、中・小学生と使う割合が少なくなっている。

やはり方言はこのまま消えてゆく運命なのかも知れないが、この「なる」の用法のように新しい形に変化していくものもあると思う。

今回の調査では調べ足りない所も多かったが、少しでも方言の変化を知ることができたので、これからその方向での研究が発展してほしいと思う。